

山口学芸大学 入学試験(令和八年度 一般 1期)

国 語 (時間 七〇分) その一

一次の文章A・Bは、「読解力」をテーマとする『20代からの文章読解』(著者 山野弘樹)の一部である。Aは文章や言葉の意味を、いかにして読み解くかについて述べた部分であり、Bは人の生きる世界を再解釈するために、批判的読解力をいかに養うかについて述べた部分である。これらを読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

A

言葉というものは、すべての情報を⑦モウラ的に相手に伝えることができません。話し言葉であれ、書き言葉であれ、必ず限界があります。たとえば相手に「あなたのことが好きです」と告白するときさえ、「どこが好きなのか?」「いつ、どのようなきっかけで好きになったのか?」という点に関しては、いきなり相手にすべてを伝えることはできません。

言葉という生き物は、必ず常に細部が抜け落ちるものです。そのような「書かれていない言葉」「書かれてはいるけれど、具体的に想像するためにはまだ足りない表現」といったものを突き詰めて理解するためにこそ、「具体についての問い」が必要です。「具体についての問い」のグループの中核を⑧拙い問い、それは「たとえばどういうことか?」というものです。その文章で書かれている内容に当てはまる具体例を問いかけながら読むのです。【中略】

「具体に関する問い」は、抽象的な文章を読むときには⑨ヒツスのものです。しかし、こうした問いは、たとえ具体的な事実が記された文章を読むときであっても、意外と効果を発揮します。

たとえば次の文章を読んでみてください。

「机の上にペットボトルが置いてある」

「空を見上げると、ポツポツと雨が降ってきた」

もしかしたら、⑩こういった文章を読むときに、「たとえばどういうことか?」ということを問う必要はあまりないように思われるかもしれませんが、この文章を読んで、そこで記されている場面は⑪ソクザに想像できるからです。

I これらの文章に単に目を通すだけでは、「なんとなく」の形でしか想像することはできません。

たとえば、「机の上にペットボトルが置いてある」という文章に対しては、次のように具体を問うことができます。

- ・ そのペットボトルに入っている液体は何なのか?
- ・ 誰がそこに置いたのか?
- ・ その机が置いてある建物はそもそもどこなのか?

これらの問いをすることで、「確かに、そのあたりは考えてなかった」という印象を持たれた方は多いのではないのでしょうか。これらの情報は、確かに先ほどの文章の中には記されていないものですが、そこで書かれている内容をより具体的に想像するためには、考えておいたほうがいい事柄です。

たとえば、「机の上にペットボトルが置いてある」という情報だけだと、「教室で友達机の上にジュースが置いてある場面」を想像することもできるし、「自分の家のダイニングテーブルの上に飲み残しのお茶が置かれている場面」を想像することもできてしまうのです。これらの想像のうち、どちらが適切なものなのかは、先ほどの文章だけでは確定することができません。こうした細部を確定するために、「たとえばどういう状況か?」ということを意識しながら読むことが重要です。

また、「空を見上げると、ポツポツと雨が降ってきた」という文章に対しても⑫同様です。これも、

- ・ 今は何時くらいで、空の色は何色なのか?
- ・ 周囲の人は傘を差しているのか? それとも足早に歩いているだけなのか?
- ・ そもそも、どこで空を見上げているのか?

こういった一連の問いを提起することができます。⑬実際、皆さんはこの文章を見てどのような場面を想像したでしょうか? ちなみに私は、空の色が濃いグレーの東京駅の駅前(夕方5時くらい)を想像しながら先ほどの文章を書きました。これに関しても、人によってイメージされる場面は大きく異なることでしょう。文章においては常に「書き漏れ」が生じます。それはこの本でさえ全く例外ではありません。だからこそ、なるべくそうした細部を具体的に想像しながら読むためには、こういった「具体についての問い」を常に意識することが大事なのです。

「具体についての問い」は、こうした具体的な文章においてさえ効力を発揮するものでした。ただ、当然のことながら、この問いは抽象性の高い文章を読むときには、さらに⑭ゼツダイな効果を発揮します。たとえば次の文章を読んでみてください。

- ※ 社会的組織の「実在」を保証しているのは、社会的制度に関するわれわれの信念体系にほかなりません。これはちょうど、電子や中性子の実在を保証しているのが現代物理学の理論体系であり、DNAの実在を保証しているのが分子生物学の理論体系であるのと同じです。(以下、1文省略)

たった3文しかない文章ですが、抽象度のレベルが一気に上がりました。柔らかな文体で書かれていますが、内容は決して簡単とは言えません。ただ、学術書や教養書といった書籍を読むためには、こういったレベルの文章を読めるように訓練する必要があります。ですので、この場で一緒に練習してみることにしましょう。

ここで言う練習は、「書かれている内容について具体的に想像する」ということです。おそらくこの野家^{のえ}さんの文章を語学力的な観点から「(4)読む」ことはできるでしょうが、「ふむふむ、なるほど」「確かに」と納得しながら「(5)読んでいる」人は少ないのではないのでしょうか？

なぜこの文章を読んで「確かに！」とならないのかと言えば、それはこの本で書かれている内容があまり具体的に想像できていないからです。字面^{じづら}を辿^{たど}るだけでは、具体的な場面を鮮明に想像することはできません。ですので、一文ずつこの内容を具体的に想像していきましょう。書かれている内容が妥当なのか否かを判断するのは、その内容を具体的に（正確に）把握してからの話です。

B

私たちの認識においては⁽⁶⁾「XをAとして見る」という「二層構造」が働いています。そして、何かを「Aとして見る」という意味づけは、多くの場合、誰かによって決定されています。

非常に身近な事例では、そうした意味づけは、まず家庭の中で、そして保護者によって行われます。確かに日常的な事物に関しては、各家庭の間でそこまで差は生まれません。しかし、何らかの行動についての意味づけに関しては、家庭環境の間でかなり差がつくことがあります。

たとえば、食事の時間にスマホをいじるという行為に対して、ある家庭においては特に問題視されないのに対して、別の家庭においては厳しく叱責される、という事態は想定可能でしょう。このとき、前者の家庭においては、「食事中のスマホ」に「悪い行い」という意味づけがなされていないのに対して、後者の家庭においてはそうした意味づけがなされているのです。そして、こうした意味づけを行っているのはそれぞれの家庭の保護者です。

これは身近な事例ですが、社会的にさらに問題になるのは、メディアによって何らかの出来事の意味づけが決定されてしまうような状況です。たとえば「偏向報道」という言葉がありますが、メディアによっては、政治家や著名人の発言を切り取り、その発言の意図を歪曲するような仕方で報道することがあります。そうしたときに、メディアは「その発言」を「悪質なもの」として意味づけ、それをお茶の間に放映するわけですが、それをそのまま受け取ってはまずいでしょう。なぜならそれは、メディアの伝えたい（ほとんど「捏造^{ねつぞう}」と言ってもいい）事柄をそのまま鵜呑^{うの}みにすることに他ならないからです。⁽⁷⁾タ^タン^ン的に、それは「騙^{だま}されている状態」であるとも言えます。

逆に、「エビデンス（証拠）」があるとされている文章を目にしたときにも、「エビデンスがある！だからこの文章は客観的なんだ」とすぐに信じてしまうのではなく、「本当にそれがエビデンスになっているのか？」ということを問う姿勢が大切です。エビデンスと共に何かの主張を行う文章は、二重の「意味づけ」を行っています。一つは、「このエビデンスがあるのだから、この内容は正しいのだ」という意味づけです。そしてもう一つは、「これはエビデンスとして機能している」という意味づけです。あるデータや情報が「エビデンス」として機能しているか否かは、出典の正当性や、そこから導き出される推論の妥当性などを含めて、総合的に判断されるべきものです。エビデンスが示されている場合でも、情報発信者や執筆者による意味づけを再検討する姿勢を忘れてはならないでしょう。

最も恐ろしい事態は、他者による都合の良い意味づけに気づくことができず、「こう言われている（書かれている）なら、実際そうなんだろう」という仕方で様々な言説を鵜呑みにしてしまうことです。

主體的に情報を「読む」ということを放棄してしまう姿勢こそが、デマや陰謀論が広まる土壌を形作ってしまいます。こうした状況を回避するためにも、私たちは「偏った意味づけがなされているのではないか？」「こうした意味づけはいったい誰によって（あるいはどのような組織によって）行われているのか？」ということを問い直す必要があります。そして、こうした問いを自覚的に提起していくことが、批判的読解力を鍛えていくこととなります。

もしかしたら、「そうした問いを提起するためには、そもそも前提として批判的読解力が必要なのではないか？」という指摘をする方もいるかもしれませんが、その点はそこまで問題ではありません。

腹筋を例に考えてみましょう。たとえば、私たちが腹筋を鍛えるためには、何をすることでしょいか？そうです。腹筋を鍛えるための運動をするのです。そのとき、「腹筋を鍛えるためには、その前提として腹筋が必要ではないのですか？」とは聞かないでしょう。腹筋を鍛えるためには、腹筋があろうがなかるうが、とにかく腹筋を使う運動をするしかありません。そしてこれと全く同じように、批判的読解力を鍛えていくためには、実際に批判的読解力を行使しなければならいのです。

それでは、どのように批判的読解力を鍛えていく必要があるのでしょうか。そのために効果的なのが、「意味づけ」の出どころを探ったり、その「意味づけ」の正当性を検討したりするという実践です。ある物事や状況に対して特定の意味づけがなされている場合、「この意味づけは誰によってなされているのか？」ということを批判的に問うということは、批判的読解力を訓練するために非常に有効であるといえるでしょう。

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 空欄 **I** の中に入る言葉として適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
【ア たとえば イ しかし ウ 決して エ 従って オ おそらく】

問三 傍線部(1)「こういった」が指す部分を文中から十字程度で抜き出し、解答欄にあらうように入れなさい。

問四 傍線部(2)「同様」が意味する内容を文中から四十字程度で抜き出し、最初と最後の五文字で答えなさい。

問五 傍線部(3)「実際、皆さんはこの文章を見てどのような場面を想像したでしょうか？」とあるが、あなただったらどのような場面を想像するか、五十字程度で答えなさい。(句読点を含む。)

問六 傍線部(4)の「読む」と、傍線部(5)「読んでいる」について、それぞれ、**A**の文中の言葉を用いて、「読む」の違いが分かるように説明しなさい。

問七 傍線部(6)『XをAとして見る』という『二層構造』とあるが、この場合の「二層構造」とはどのような意味か。次の文の空欄【Ⅱ】に、**B**の文中から当てはまる言葉を漢字二字で抜き出し、入れなさい。

私たちが対象Xを見る場合、たいていは、まず対象Xを直接的に知覚し、その上で、その知覚した対象Xを、ある一定の【Ⅱ】のまとまりを持った対象Aとして認識(解釈)する。

問八 傍線部(7)「タンの」の「タン」に相当する漢字を含む言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア タン究 イ タン独 ウ 先タン エ 落タン オ 負タン

問九 **B**の文章の論旨と合致しないものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちの社会は、自分以外の誰かによって意味づけられた情報や文章、出来事であふれている。
- イ たとえば「食事中のスマホ」のような日常的行動における意味づけは、家庭間で大きな差は生まれない。
- ウ エビデンスを持っている情報や文章でも、発信者や執筆者による意味づけを自ら問い直す必要がある。
- エ 他者による意味づけに気づかず主体的な読解を放棄すると、デマや陰謀論が広まる土壌を形作ってしまう。
- オ 批判的読解力を鍛えていくためには、その前提として、批判的読解力を持つておくことが必要である。

二 次の文章は、佐多稲子の小説『水』の後半部分である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

主人公の幾代は一昨年（一）の冬、郷里の富山から、東京の旅館に住み込みで働きに出てきた、まだ二十歳前の娘である。幾代は五歳の時に父を失い、左脚が少し短かったが、つらいことがあっても、ずっと母親と一緒に乗り越えてきた。左脚のせいで郷里の紡績会社では採用にならず、東京の旅館に出てきたが、今では労苦の多い母への送金もでき、時につらい思いをすることはあっても、幾代はここでの勤めに満足していた。

幾代は、明るいとは云えないにしろ、素直な性質だった。旅館の台所で終日立ち働きながら、身体（二）の引け目を見せなかった。どこかに負けん気をひそめていて、それが素直さにもなり、身体（三）の引け目を見せぬ働きものにもするらしかった。この旅館に住み込んで一年と数カ月で、料理方も主人も、幾代の働きぶりの誠実さを認めた。東京の他人の中に出て苦勞するものと覚悟してきたから、幾代の方では自分が認められるのを※仕合わせに感じさえした。

「幾ちゃんはいいかみさんになるよ」

あるとき幾代は、料理人が女中たちをつかまえてそう云っているのを聞きつけた。そこまではよかった。が料理人は幾代が聞いているのを気づかずに、あとはにやついて、幾代の脚のことにふれ、あけすけなほめ言葉までつけ足した。幾代はそのときはクチビル（四）を嚙かんで涙を浮べた。彼女にはそんなあけすけな評言は、自分の悲しみをひそめた身体の中までずけずけと踏み込まれるようにしか聞けなかった。

主人は、はじめ④オンケイをほどこしたつもりで幾代をやとったがおもわぬ拾いものをしたわけだった。幾代がこの頃から、郷里の母親に東京見物をさせてやろう、とおもいはじめたのも、主人からそう云われたからだだった。主人は幾代に優しい言葉をかける意味で、田舎のおっかさんに東京見物をさせておやりと云い、泊るのはうちで泊めてやるよ、と云ったのだった。

そんなふうだったから、ハハキトクスグカヘレの電報がきたとき、幾代は、早速暇がとれるものとおもっていた。自分の一大事は、主人もそのとおりに承知するものとしか考えなかった。それがそのとおりに運ばなかった。⁽²⁾幾代は、そこに他人を感じ、夜更けて床についてから、ひとりで泣いた。

ハハシンダ、カヘルカ、と次の電報が今朝配達された。幾代は台所の板に⁽³⁾へたつと坐ると、

「ああ、かアちゃ」

と、細い、しぼるような泣き声を上げて突っ伏した。

彼女はもう朝のやりかけの仕事をしなかった。泣きながら身まわりのものと貯金通帳を鞆に詰めると、河岸に出かけて留守の主人の帰りを待たずに、女主人にだけ挨拶をして上野駅へ駆けつけた。幾代が出てくるときも、女主人は、夫の留守を口実に引きとめようとした。

「それに、もう死んじゃったんだろ。あんたが帰ったって、死んだものが生きかえるわけでもないしねえ」

幾代は固い顔をしてそれを聞いていた。聞いていたけれど、反応さえ見せなかった。ズックの鞆を抱えて旅館の台所口から出て歩き出す幾代は、⁽⁴⁾いつもより腰のゆれが強かった。

母親が死んでしまう、という実感にそられて、はじめて幾代は、自分と母親とのつながりの深さに気づいた。それは幾代にとって唯一の安心の場所が無くなることだった。幾代が自分の身体の引け目を感じずにすむのは、母親の前だけであつたと気がつくからだった。幾代の身体の悲しさが、もし母親の云うように前世からの約束ごとならば、その罪は母親もいっしょに被るものだった。あるいは母親の罪のために幾代が悲しみを背負っているのかもしれない。幾代は母親の労苦を知っていたからそんなことを口に出しもしなかったけれど、兄や姉の前にさえ勝氣にふるまう意識の操作を、母親に対してだけは感ぜずにすんだ。

その母親が死んでしまう。一刻も早く、母親の前に行つて、母親と一緒に泣きたかつた。母親はすでに死んでいるのかもしれない。が、幾代には母の姿は、木綿の薄い夜具の中に眠っている姿でしか想像できなかった。そこにまだ母親は存在しているはずだった。幾代はそんな母親を想像すると、今までの感情になかつた性質の哀れみで、可哀想、と切実に感じた。もう母親はすべてに對してすっかり無力になっているにちがいないからであつた。しかもその哀れみの感情は、幾代自身にも及ぼして、劇しい悲哀がこみ上げていた。昨日の電報のとき、主人に負けてしまつた自分の弱さから、母親まで敗北のまき添えにしたような口惜しさがあつて、幾代の悲哀を深くしていた。

⁽⁵⁾幾代はもう完全にひとりになるはずだった。ひとりになるということは、彼女の身体の悲しみの重さを、ひとりで背負つてゆくことだった。ホームの混雑は幾代をひとり⁽⁶⁾ソガイしておのの行方に氣負い立っていた。幾代の方でも、その騒がしさは無関係だった。

幾代の乗るはずの列車がホームに入るまでまだ一時間待たねばならなかつた。彼女がしゃがんでいる前の列車は、いよいよ発車するらしかつた。合図のベルがホームに流れた。それをしおに、幾代は鞆を抱え腰を立てて立ち上つた。泣きつづけた彼女の小さな顔は、色白の皮膚を晒したように赤味を消して、⁽⁷⁾瞼がタれ、細い目がいよいよ細くなつていた。

幾代は、動きだした列車と反対の方向に、重い足で歩き出した。彼女の肩が歩調にともなつて、ゆっくり揺れた。彼女はそのとき、列車の窓の視線に自分をあからさまにしたわけだった。

駅員⁽⁸⁾詰所の建物の先きに水道があつた。水道の蛇口はさつきから水を出しつ放しであつた。駅員が葉かんに水を汲んでそのままくるりと身体をまわして元氣に行つてしまつてからあと、水は当てなしに流れつづけていた。そのそばを通つてゆくものも多かつたが、誰ひとり蛇口の栓を閉めなかつた。

幾代は、悲しみを運んでそこまで歩いてきた。顔を上げていたので、⁽⁹⁾瞼をあふれた涙が頬に筋を引いた。が、幾代は、水道のそばを通り抜けぎわに、蛇口の栓を閉めた。音を立てて落ちていた水がとまつた。が、幾代は自分のその動作に気づいてはいないらしかつた。それは無意識に行われただけだった。列車は音を立てて出てゆき、明るくなつたあとに街の眺めが展が⁽¹⁰⁾つた。が幾代は、再びもとの場所にもどつてしゃがみ込むと、今までと同じように泣きつづけた。その場所に、さえぎるものがなくなつて春の陽があつた。

(注) ※仕合わせⅡよい巡り合わせによつて得られた幸福感

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 傍線部(1)「引け目」の意味として適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 責任を感じる気持ち イ 一歩も引かない気持ち ウ 怒りの気持ち エ 劣等感 オ 疲れ

問三 傍線部(2)「幾代は、そこに他人を感じ、夜更けて床についてから、ひとりで泣いた。」とあるが、この部分は、幾代のどのような心情を表しているか。次のア～オから適切なものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の働きを認め、優しい言葉をかけてくれる主人だが、幾代は他人を信じられず、ずっと孤独でいる。
イ 幾代は、同郷で、身内のような安心感を抱いてきた主人とのつながりが崩れ、心の隔たりを感じている。
ウ これまでその優しい言葉を信頼してきただけに、幾代は、主人の冷たく自分本位の仕打ちを憎んでいる。
エ 幾代は、主人が自分の願いを理解し、配慮してくれると思ったのに、その期待が裏切られ、失望している。
オ 幾代は、自分にとっての一大事が主人にはそうではなかったという現実に直面し、深い孤独を感じている。

問四 傍線部(3)「へたつと坐ると」とあるが、この「へたつと」は、幾代のどのような心情や様子を表しているか。次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰にも悲しみを気づかれないよう、音を立てず静かに坐る様子。
イ 休暇が取れず帰れなくて兄や姉に申し訳ないと許しを請う様子。
ウ 悲しみはあるが、すぐに帰郷しても仕方ないと覚悟して坐る様子。
エ 敵しかった母に叱られないようにと涙をぐつとこらえて坐る様子。
オ 母の死を知った悲しみと衝撃で立つておれず崩れるように坐る様子。

問五 傍線部(4)「いつもより腰のゆれが強かった。」とあるが、この部分と同じような幾代の心情が読み取れる部分を、傍線部(4)より前の部分から一か所、十五字以内で抜き出しなさい。

問六 傍線部(5)「幾代はもう完全にひとりになるはずだった。」とあるが、この「はずだった」という表現から、作者のどのような意図が感じられるか、解答欄にあらうように五十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部(6)「が、幾代は、水道のそばを通り抜けぎわに、蛇口の栓を閉めた。」とあるが、幾代が水道の蛇口の栓を閉めた行動から、幾代のどのような心情が読み取れるか。次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何物にも邪魔されず母を失った悲しみに一人で浸り続けたいという、孤独の世界への陶醉。
イ 駅員も行き交う乗客たちも誰も水道水を止めず、皆が水の無駄使いをしているという怒り。
ウ 周囲を行き交う人に涙を見せる恥ずかしさを隠すために、何か行動しなければという焦り。
エ 自分を支え続けてくれた母の死を乗り越え、一人だけで力強く生きていくという強い決意。
オ 悲しみや孤独感の底にしながら、無意識のうちにも歩みを進めようとする幾代の変化の兆し。

問八 この作品では、幾代の「悲しみ」や「孤独感」が繊細に描かれている。あなた自身の体験と重ねながら、「悲しみ」や「孤独感」と人の成長の関係について、あなたの考えを二百字以内で述べなさい。

三 次の文章は能楽論書『風姿花伝』の一節で、能の演技について述べたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合により本文を一部改めた部分がある。）

老人の物まね、この道の※^{あうぎ}奥義なり。能の位^{くらゐ}、やがてよそ目にあらはるる事なれば、これ、第一の大事なり。およそ、能をよき程極めたる※^{ほじきわ}為手も、A老^{おい}いたる姿は得ぬ人多し。たとへば、木樵^{きこり}・汐汲^{しほくみ}の※^{わざもの}態物などの※^{おきなたち}翁形をし寄せぬれば、1やがて上手と申す事、Bこれ、誤りたる批判なり。※^{かぶり}冠・直衣^{なほし}、ア烏帽子^{くわぼし}、イ狩衣^{かりぎぬ}の老人の姿、得たらん人ならではの似合ふべからず。稽古^{こぎう}の功入^{こういり}りて、位上^{のほ}らでは似合ふべからず。

また、※花なくば面白き所あるCまじ。およそ、老人の立ち振舞、老いぬればとて、腰膝^{こしひざ}をかがめ、身をつむれば、花失^うせて、※古様^{こやう}に見ゆるなり。さるほどに、面白き所稀^{まれ}なり。ただ、大かた^{おほ}、いかにもいかにもそぞろかで、しとやかに立ち振舞ふべし。

2ことさら、老人の※舞がかり、無上の大事なり。（D）はありて年寄^{としより}と見ゆるる※公案^{こうあん}、くはしく習ふべし。Eただ、老木に花の咲かんがごとし。

（注）

- ※奥義 Ⅱ 極意。最奥の段階。
※態物 Ⅱ 仕事により特徴のある姿態で似せやすい。
※冠・直衣、烏帽子、狩衣 Ⅱ 貴人の正装と略装。
※古様 Ⅱ 生気のないみすばらしい有様。
※公案 Ⅱ 工夫。
※為手 Ⅱ 主人公となる役者。
※翁形 Ⅱ 年寄りめいた格好。
※花 Ⅱ 観客を惹きつける面白さ、味わい。
※舞がかり Ⅱ 舞う姿。

問一 波線部ア・イの古文における読みを、現代仮名遣いで答えなさい。

問二 二重傍線部1「やがて」・2「ことさら」の意味を、それぞれア～エから選び記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-----|---|------|---|------|
| 1 | ア | いつか | イ | すぐに | ウ | たいそう | エ | 一般に |
| 2 | ア | このように | イ | 自然と | ウ | その上 | エ | とりわけ |

問三 傍線部A「古い」の終止形を答えなさい。

問四 傍線部Bで「誤りたる批判なり。」と述べている理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 年老いた姿の物まねは一般的に難しい演技の一つであるから。
- イ 能をかなりきわめた役者なら、老人の物まねは簡単だから。
- ウ 特徴ある姿や職業の老人の演技は、芸力が必要で難しいから。
- エ 高貴で品位ある老人の演技の方が、年功と芸力が必要だから。

問五 傍線部Cを、例にならって文法的に説明しなさい。

- 例 この道の奥義なり。 断定の意味の助動詞

問六 文中の空欄（D）に入る適語を、文中から探し答えなさい。

問七 傍線部Eを現代語訳しなさい。

問八 『風姿花伝』は室町時代の作品である。これと同じ時代の作品を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|--------|
| ア | 万葉集 | イ | 枕草子 | ウ | 更級日記 | エ | 曾我物語 | オ | 宇治拾遺物語 |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|--------|